

備中国における玄寶生誕地伝説

はじめに

平安時代初期に亡くなった南都法相宗興福寺の高僧玄寶は、天皇から厚い信頼を寄せられたにもかかわらず、世俗的な名声を厭い、都から遠く離れた土地に隠遁する道を選んだ。このような姿勢が玄寶のイメージを形成し、後代、玄寶は、隠徳の聖の理想像ととらえられ、数々の説話が生み出されてゆくこととなったようである。^①玄寶が大僧都職を辞し備中国哲多郡湯川寺に隠遁したことについては、複数の確実な資料が残されているので史実とみられるが、^②備中国での玄寶の消息はよくわかっていない。玄寶に関する説話は、『江談抄』、『古事談』、『発心集』、『閑居友』、『古今著聞集』、『撰集抄』、『三國伝記』など、多くの説話集に収められているが、備中国での逸話を記すものはない。また、『元亨釈書』、『東国高僧伝』、『南都高僧伝』、『扶桑隱逸伝』、『本朝高僧伝』などの伝記類においても、備中国での玄寶の詳しい消息は記されていない。

しかし、備中国での玄寶の動静は、文献資料にはほとんど残されていないが、口頭伝承の世界ではいまだに生き生きと語られている。^③備中国各地での玄寶に関する伝説は、実像はともかく、少なくとも伝承地周辺の人々に玄寶がどのようにとらえられてきたかをうかがうことができるものであり、文献資料の間隙を埋めるものとして、玄寶像の一端を語る参考資料となりうるであろう。

原 田 信 之

玄寶はいつどこで生まれたのだろうか。玄寶の生年に関しては数説あるが、興福寺本『僧綱補任』弘仁九年の項に、「前大僧都玄寶 六月十七入滅。河内国人。俗姓弓削連。」^④と記されているのに従いたい。このことから、玄寶の生年は天平六年（七三四）で、没年は弘仁九年（八一八）六月十七日ということになる。

玄寶の生誕地に関しては、先にみた興福寺本『僧綱補任』弘仁九年の項に玄寶は「河内国人。俗姓弓削連」とあるように、河内国で生まれたという説がよく知られている。元亨二年（一一三二）成立の虎関師鍊『元亨釈書』巻第九の「釈玄寶」の項にも、「姓弓削氏。内州人。（略）疾族人道鏡媚稱徳帝」。潜入「伯州之山」^⑤とあり、姓は弓削氏で河内国の人とされている。『元亨釈書』では、玄寶は一族の弓削道鏡が称徳女帝に媚びて政界に進出して権勢をふるったのを嫌い、伯耆国山中に隠遁したことになっている。玄寶が道鏡と同族の弓削氏であったかどうかはよくわからないが、道鏡も玄寶も同時代の法相宗の僧侶であったことから、玄寶が道鏡の生き方を嫌い隠遁の道を選んだということはあると思われる。また、元禄十五年（一七〇二）成立の師蛭『本朝高僧伝』巻第四十六の「備中湯川寺沙門玄寶伝」の項にも、「姓弓削氏。河州人。（略）悪族人道鏡媚稱徳帝」。潜出「和州」^⑥とある。このことから、玄寶は江戸時代に至るまで道鏡と同族の弓削氏で河内国の人と認識されていたことがわかる。ただし、玄寶伝に関しては、『元亨釈書』の玄寶

伝の影響力がかなり強く、『元亨釈書』以後の僧伝類のほとんどが『元亨釈書』の玄實伝の記述をそのまま利用して記述している。

興味深いことに、備中国英賀郡水田（北房町上水田小殿）には、玄實生誕地伝説が伝承されている。その地には玄實がそこで生まれたことに由来するという「高僧屋敷」という地名が残っており、その地の近くには玄實の母が玄實の臍帯（へそのお）を納めたという伝承のある臍帯寺（ほそおじ）という寺院がある。この、玄實が備中国で生まれたという説は、備中国でのみ知られているようである。

本稿は、できるかぎり事例を提示するよう努めながら、これまで存在が知られていなかった備中国の玄實生誕地伝説について、その全体像を紹介し考察を加えることを目的とする。

地名「高僧屋敷」と行者様

玄實が備中国で生まれたことを記す文献としては、明治十一年（一八七八）成立の奥田楽淡『備中略史』の「玄實僧都」の項に「釈玄實姓は弓削氏、備中英賀郡水田の人（一日河内の人）」とある程度で、古文獻資料は残っていない。『備中略史』の備中国生誕説は、江戸時代末期の伝承を書き留めたものと推定される。しかし、江戸時代末期の地誌類に玄實備中国生誕説がほとんど載っていないことから、備中国の中でも広く知られていた説ではなかったとみられる。『備中略史』を編纂した奥田楽淡は、備中高梁藩医龍田道仙の二子で藩儒奥田楽山の義子となり、山田方谷に学び、高梁藩の文武監査役まで昇り、晩年は下道郡山田村で後進を導いて明治十七年に六十四歳で亡くなった人であるという^⑧。奥田楽淡が備中高梁の人であったから、すぐ近くの英賀郡水田の玄實生誕伝説を知りえたと推定される。

まず、玄實がそこで生まれたことに由来するという「高僧屋敷（こうそうやしき）」という地名をめぐる伝承から検討してみることとする。備中国英賀郡水田（現在の岡山県上房郡北房町上水田小殿）には、「高僧屋敷」という地名が残っており、玄實がこの地で生誕したという伝承がある。「高僧屋敷」という地名のあるその土地は現在畑になっており、道路に面した一角が四角くコンクリートで塗り固められ、その上に小さいコンクリートの祠がある。そしてそのすぐ近くに「玄實僧都生誕之地」と刻まれた石碑（高さ一・三メートル、幅〇・七メートル）が建っている。その石碑の裏には「玄實僧都は北房町大字上水田小殿高僧屋敷で天平十年（七三八年）にこの地で生誕されたと伝へられている幼児のころから聡明で奈良の興福寺で修業し奈良時代末から平安時代初期のころまで名刹に掬われぬ高僧で仏の道を求め続けるとともに医療の研究にも修業を重ね薬草薬石の用法を用いて人々の幸せと生活の安定に力を尽され八百十八年六月に湯川寺で入寂された今も玄實の人柄が人々の心の中に生き続けている。ノ平成八年四月吉日建之」とあり、さらに碑文の下に「建立者ノ北房町ノ武村博ノ西杉一夫ノ山本潔」と刻まれている。この石碑は、上水田小殿（かみみずたおどの）の武村博さんから三名が協力して、この地で生まれたとされる玄實を顕彰するために、平成八年に建立したものだということである。現在はこの石碑があるおかげで、「高僧屋敷」の場所がすぐわかるようになっていた。

事例1 「玄實生誕地高僧屋敷と臍帯寺」

この畑が高僧屋敷。これはもう前から、所有は個人所有でした。このの、小さい一画だけがねえ、いわゆる、公共地いいですか、小殿の部落有になつとつたんです。これは今のもつ、倍以上はありましたからねえ。へで古い柿の木があつたり、へえから古い古い祠のあの。木造のねえ、何（祠）があつたんですけどもつ、腐れてから。今はそうですねあ、こ

れ、もう、十年ぐらい前ですかねえ、買ってきて、替えたんです。

まあ、詳しいことはわかりませんが、ここへ山本さんという人が、今はもう亡くなされましたけど、その人がもう、

「ここへ、玄寶さんが生まれたんじゃない」というて。一つはあの、あれ（石碑の文）にもありますけれど、河内ですかねえ、大阪のねえ。あつこの説もあるんですけど。まあここで、大きくなった。

それがまあ、そこへ、臍帯寺（ほそんじ）にもおそらく。こんだあ、臍帯寺（ほそおじ）というんですけど、参られたら色々聞かれたらわかると思うんですけど。お母さんがとにかくあつこで腹帯をもらって、へで、子どもの男の子ができたからというんでその臍帯（へそのお）をあそこに納めて、まあ、臍帯寺（ほそおじ）という。ほそんじ、ほそんじ、いうんですけど、臍帯寺（ほそおじ）という、まあお寺なんですけど。そういうことで、いわれがものすごく深いから、おそらくここで生まれられたんじゃないか、というふうなことで。

この「玄寶生誕地高僧屋敷と臍帯寺」は、北房町上水田小殿で採集したもので、玄寶がこの地で生まれたので「高僧屋敷」という地名となり、玄寶の母親がこの地から臍帯寺に参って腹帯をもらい、男の子（後の玄寶）ができたからその臍帯（へそのお）を寺に納めたという話である。高僧屋敷という土地は今個人所有となっているが、四角くコンクリートで塗り固められた一画は、現在でも小殿集落の公共地になっているというのである。その、四角くコンクリートで塗り固められた一画の上には玄寶を祭る小祠がある。小祠がある公共地の一画はもっと広がったというが、かつて道路を拡張した時からかなり狭くなってしまったそうである。

事例2 「高僧屋敷と行者様」

まああの、あそこは、高僧屋敷いう、地名ですから、普段あそこらあ

たりを使っておる人が、高僧屋敷いう。それから、玄寶さんの、行者様いうのはもう、昔からそういうように、言い慣らされてきておったんです。だから、お正月になると、あそこに新しい餅を、あげたりして。（中略）玄寶さんを、行者さん、いうて、昔から言い慣らされとったんじゃないかなあ思つ。

この「高僧屋敷と行者様」は「高僧屋敷」にある玄寶を祭る小祠を土地では「行者様」と呼んでいるという語りである。念のために「行者様」と修験道との関係を聞いてみたが、全く関係ないとのことであった。小殿集落で管理してきたという「行者様」の祭りは特にはないそうであるが、皆で掃除したり、正月に新しい餅をお供えしたりはするというのである。高僧屋敷という地には、昔、古い大きな柿の木（西条柿などのような良い柿ではなかったという）があつたそう、柿の木の周辺には草が生えていたという。また、高僧屋敷には、昔は大きく平たい石の上に古く大きい木造の「行者様」の祠が建っていたが、古くなって腐ってきたので、十年程前（平成初年頃か）に若い人が総社あたりから今のコンクリートの小さい祠を買ってきて据えたそうである。

玄寶の時代、天皇や貴族たちが高僧に期待したものの一つに、病などを即座に治癒させるような呪術的能力があつた。玄寶は興福寺で学問を積んだ碩学であつたが、それと同時に呪術的能力も群を抜くものであつたようである。実際、山中で隠遁生活を送る玄寶は、歴代の天皇からたびたび召還されて都へ上り、病平癒の祈祷を行っている。そして、桓武帝・平城帝・嵯峨帝という三代の天皇から厚い信頼を得ていた。山中で隠遁生活を送り高い呪術的能力があつたらしい玄寶僧都には、確かに山林修行をする行者のイメージがあるが、玄寶僧都を祭る祠が土地の人々に「行者様」と称されてきた事実は、極めて興味深いことといえよう。

広大山縁起と行基・玄寶伝承

玄寶生誕地伝説が伝承されている北房町上水田小殿「高僧屋敷」の南西方向の山の中に、玄寶の母が玄寶の臍帯（へそのお）を納めたという伝承のある臍帯寺（ほそおじ、ほそんじ）という寺院がある。岡山県上房郡有漢町上有漢長代にある広大山臍帯寺は真言宗大覚寺派の寺院で、寺伝では聖武天皇の神龜三年（七二六）に行基が開基したとされる。現在地に移転する前は、四峰山（四ツ畝山、よつつなやま）の山麓の堂風呂（どうふうろ）という所にあつたという。広大山臍帯寺には「広大山縁起」（片山家文書）が残されている。玄寶生誕地伝説を考えるうえで参考となる数少ない資料の一つであるため、全文を引用する。旧字体・異体字等は原則として通行の字体に改め、句読点を付した。なお、注記は丸括弧でくくった。内容分析の都合上、便宜的にA、B、Cの符号を付した。

【広大山縁起】全文

広大山縁起書写

A 抑当山の濫觴は、人皇四十五代聖武天皇之御宇神龜年中行基菩薩の創建にして、本尊聖觀音自在菩薩の御長六尺有余の立像并に脇土（土カ）不動・毘沙門共に是行基尊都一刀三礼して刻せ給ふ尊作也。此時行基本尊に誓して鬼門除災之願を発し梅之木の以散杖当寺境内巖穴を加持し給ふ。忽涌泉滔々たり。以此水符を調へ一切衆生の疾病、難産の女に施す時は、必ず安全なさしめんとの御誓なり。此水あらん限りは我誓願空しからずと示し給ふ。今本堂の後ろに涌出す阿伽井の水是なり。奇哉哉此靈水不淨の意味ある時は内に水音有てもかならず不出、清淨の法を修する時は速に出る事顯然たり。猶示

曰く弥誓願空しからずば此散杖も末世に磐も止んと側の地にさし給ふ。宜哉一老木となれり。依是を散杖木と云伝う。天正之度、当国一円兵乱す。四ツ畝忍山城攻之砌、為太閤秀吉境内焼亡す。悲哉此散杖過半枯木となり、今の散杖は実生之再木也。当寺四ツ畝より西南にあたり、是より四ツ畝丑寅に当れり。代々鬼門除災の祈願地なり。往昔より四ツ畝に並ぶ堂婦路の山上当寺旧跡なり。鎮守六社大権現鎮座し給ふ。中興加持の地に移す。今の寺是なり。

B 当国出生玄寶僧都、母の胎内に託する事十二月、母公大いに案じ給ひ、当山に祈らせ給ふ。則夢中に靈童来り、『仏縁の男子無難に出生すへし』と教ありて、十三日月に平産あり。困て七十五日を経て、母子共一七日參籠仕給ひ、厚く仏恩を礼敬し、臍の帯を納め給ふ。猶童子の行末を祈給と云如、仏教生長ののち僧と成、名を発、海内て当国七名人の其言人なり。則阿賀郡湯川に庵居し給へば、程近く折々登山有。山寺の渡業は如斯と鹿を呼て牛にかへ田畑を耕し戯給ふと云。僧都の歌ノ山田もる僧都の身こそ悲しけれ あきはてぬれば問う人もなしノ奇篤広大成靈場たるをもつて広大山ととなへ、臍帯奉納の以因縁臍帯寺と改給ふ。其先、細尾寺と云り。妊娠胎中為守護加持帯を出す事是也。猶出産長引くものにかねの帯を授るも矢張此因縁也。

C 永正の頃、松山城内に障災有て不止。占方に問給へば、是より丑寅に当り希有之靈仏あり。是を祈給へば速に治るべし。是全鬼門の災也とす。則諸士に命じて尋ね給ふに此本尊也。仍て鬼門除災の御祈禱を示給ふ。其夜則示現ありて障化速に去しより、今に至つて松山御城鬼門除災の靈場と定り、正五九月鎮札納来る事今に退転なし。天正年中より当国一円兵乱す。四ツ畝再度落城の砌、残兵院内に忍と疑ひ伽藍悉く焼亡す。時に不思議と本尊三体回録（禄カ）、殃なく

逸爵として灰の中に残り給ふ。煙風にあたり給ふ色も見えずとなん。仏願不遠此年の大将陣中に狂死せしと云伝。可恐々々。別して女子の難産をあわれみ給ひ、一度登山して結縁の輩はかならず平産成しめんと御誓也。嗚呼、星霜遠く積るとも、仏徳の著明事如是。其外奇談あげて数るに不遑と云々。ノ茲本尊開扉の時正に至るといへども、貧寺小且難為以何朝昏悲泣袂を湿す。依之発大願有無の両縁の壇門を叩、密法の祈祷を修し、施主の以多力開扉満願至今日十方の善男女迎へ拜礼あり。心中の諸願を備へ、奇篤広大の靈験を受給へ。心信請願の輩は患病平癒災障消除富貴開運の場に至らん事、夢々疑あるべからず。六賢々々。

今月今日 現住法印 英学 謹白

この「広大山縁起」には、行基伝承と玄寶伝承に関する記述がみられる。縁起のA部分には、神龜年中（七二四～七二九）に行基（六六八～七四九）が四ツ畝山の堂婦路という所に寺を創建したが、天正（一五七三～一五九二）の頃に兵火で焼亡したため、現在地に移転したことが記されている。行基が本尊の聖観世音菩薩と脇侍の不動・毘沙門の計三像を彫ったという仏像造立伝説や、行基が梅の木を杖で巖穴を加持すると泉がわいたという「杖つき井戸（弘法水）」の伝説、行基が地にさしたその散杖が根付いて老木となり「散杖木」と呼ばれていたという「杖梅」の伝説など、全国に広く分布する話型が縁起に取り込まれていることがわかる。

玄寶に関する記述があるのはB部分である。このB部分によれば、備中国で出生した玄寶は、母の胎内で十二月月たつても生まれなかつたため、母が細尾寺で祈ると、夢で靈童が『仏縁のある男子が無事に生まれるであろう』と告げ、十三カ月で生まれた。よって、七十五日を経て、母子共に参籠して仏恩を謝して臍帯を納めた。長じて名僧となり、阿寶

郡湯川に庵居し、近いので折々この山寺に登ってきた。臍帯奉納の因縁から、細尾寺を臍帯寺と改めた、ということである。

C部分には、永正（一五〇四～一五二一）の頃より松山城の鬼門除災の霊場とされたこと、天正年中の四ツ畝城落城の際に焼亡したが本尊三体は焼け残ったこと、寺を焼いた大将が陣中で狂死したこと、寺に参詣した女性は安産することなどが記されている。

この「広大山縁起」（片山家文書）を草したのは、縁起の末尾に「現住法印 英学 謹白」とあることから、臍帯寺現住三十七世大本一学氏より四代前の三十三世大本英学氏であつたらしいことがわかる。また、一学氏によると、この縁起の元となる文献は現在見あたらないそつであるから、江戸時代末期から明治時代初期頃の土地の伝承を参考として、英学氏がおそらく明治期にまとめたものかと推定される。さらに作成年次を詰めるなら、縁起のC部分に「茲本尊開扉の時正に至るといへども」と記されている部分が手がかりになる。この記述から、この縁起が臍帯寺で三十三年に一回行われてきた観音堂御開扉の法要の際に作成されたものらしいことがわかる。臍帯寺の観音堂御開扉は、新しい年代順にさかのぼって記すと、平成六年（一九九四）、昭和三十七年（一九六二）。本来は昭和三十六年であつたが、記念の釣り鐘の鑄造の遅れで一年延期されたという、昭和三年（一九二八）、明治二十八年（一八九五）と、三十三年ごとに行われてきた。このことから、この「広大山縁起」が作成されたのは、明治二十八年（一八九五）の観音堂御開扉の年と推定される。

臍帯寺と玄寶の母

次に、行基開基伝説や玄寶と母の伝説などの、臍帯寺をめぐる種々の伝説が、土地でどのように伝承されているかをみてみることにする。

事例3 「臈帯寺の開基と移転の由来」

あのね、ここのお寺自体はね、場所はここにあったんじゃないんですよ。場所はこれから二キロぐらい、ちょっと、北の方に入りました、四ツ畝(よつうね)って、ここらじゃ四ツ畝と呼ぶんですが、山がありまして、そのの、こちから行く、そちらへ向ける道があるんですけどね。その道の、四ツ畝まで行くちょっと手前なんですけど、そこに堂風呂(どうぶろ)ってゆう、字名があるんです。そこにどうもこのお寺はあったようです。(中略)あれがですね、安土桃山時代の初めぐらいでしょつかね、あそこ(堂風呂)にありました、お寺がね、まあいわば兵火に遭いましてね。何か、敵が、逃げ込んだからといって、火をつけられて。まあ、これ言い伝えなんですけど、その時、ご本尊を、持ち出した方がいて、そのご本尊を安置する場所っていつのを、まあ、どこにしようかっていうふうになった時に、ここへ、關伽井戸(あかいど)っていいましてね、密教では儀式の時に關伽水(あかすい)というお水を使うんですよ。そのお水をくみます井戸が、井戸というよりわき水なんですよ。わき水があったようですよ。ここから水を取って、ここへくみに来て、使っていた。だと思っんです。その關伽井戸がここにありましたので、じゃ關伽井戸のそばへ、火災の中から持ち出したご本尊を安置しよう、ということになってこの場所へ。(中略)行基井戸ってゆうて、關伽水をお供えするための、水を、くむ場所として、行基さんがこう寺を造られた時にもうこの、ところへ、水をお供えするのにここからくんだという、あれがありましたね。それでここが行基井戸といわれるんですけど、これはおそらく、きちっとした名前じゃないと思います。だからそういう、言い伝えにはなってますけど。それはおそらく、土地の人が昔からよつうられたか、そういうものじゃないかと思っますけどね。言い伝えではね、ですから、神龜三年ですから、七二六年、に造られたことにはな

ってるんですよ。開山ですね。いわれでは、聖武天皇の勅願で、この地へ造られたというふうにはいわれてますけど。

事例3 には、臈帯寺の開基と移転の由来が語られている。臈帯寺は、聖武天皇の勅願で神龜三年に行基が開基したとされ、最初四峰山(四ツ畝山)の堂風呂という所にあつたが、兵火で焼けたため現在地に移転したという。現在地は、行基井戸とよばれる關伽水をくむ井戸がある場所であつたため、移転の地とされたということである。現在もこの行基井戸は臈帯寺の本堂奥の崖下であり、岩の奥からわいた水が、岩のくぼみにたまつたようになっている。現住一学氏によると、行基井戸の奥は鍾乳洞になっており、水の出が悪くなつたので先住の代に穴を大きくしたということであつた(穴の奥には三、四メートル位しか入れないという)。前節でみた「広大山縁起」のA部分には、行基が梅の木を杖で巖穴を加持すると泉がわいたという「杖つき井戸」の伝説が記されていたが、行基に由来するという伝説的井戸のある場所が現在の臈帯寺の地ということになる。兵火で焼けて現在地に移転した時のことに関しては、「広大山縁起」のC部分の記述に詳しい。なお、兵火にあつた時に本尊三体が焼け残つたことや、寺を焼いた大将が狂死したことに關しても、土地で伝説の断片を聞くことができた。

事例4 「玄寶の母と臈帯寺」

これも、巖密に、どうなのかわかりませんが、私が爺さんから聞いたのはね、玄寶僧都がお生まれになる前にお母さんがですね、この寺の觀音様が非常に御利益があるというのを聞きになって、でここへお見えになりましたね。その辺から、ちょっと、話の物語になってしまつてんですけど。何か、十月十日を過ぎて、来られたらしいんですけど、なかなかお生まれにならなかつたそうです。それでお母さんはこの、觀音様へお参りになって、安産を祈願したところがその、みやすくお産を

した、という言い伝えは聞いています。¹³⁾

この 事例4 「玄寶の母と臍帯寺」は、玄寶の母が十月十日を過ぎても子が生まれなかったため、臍帯寺の観音様へお参りになって安産を祈願すると無事に生まれたという話である。先に示した 事例1 「玄寶生誕地高僧屋敷と臍帯寺」で、玄寶の母が小殿から臍帯寺に参って腹帯をもらい、男の子ができたからその臍帯（へそのお）を寺に納めたという伝説をみたように、伝承の中では、玄寶と臍帯寺は深い関係があったとされている。伝承では、玄寶の母が生まれた子の臍帯（へそのお）を寺に納めたということから、「細尾寺（ほそおじ）」という寺の表記が「臍帯寺」と改められたとされ、今でも臍帯寺の観音は安産観音としてよく知られている。前節でみた「広大山縁起」のB部分には、玄寶の母が細尾寺で祈ると夢で靈童がお告げをし、無事に十三カ月で生まれたため、後日母子共に参籠して仏恩を謝して臍帯を納めたことなど詳しい状況説明がなされていて、参考になる。残念なことに、臍帯寺周辺で玄寶の伝説を知る人はほとんどおらず、「広大山縁起」の記述が現在では最も詳しいという状況であった。事例4 は、現住一学氏の語りで、先住から聞いたということであった。

「広大山縁起」や 事例3 でみたように、現在地に移転する前、臍帯寺は四峰山（四ツ畝山）の山麓の堂風呂（堂婦路）にあったという。土地の伝承では、玄寶は北房町上水田小殿で生まれ、小殿に住む玄寶の母が四ツ畝山の山麓の堂風呂にあった細尾寺にお参りになって安産を祈願したということであったが、興味深いことに、小殿周辺と四ツ畝山麓を結ぶ山道がかつて存在していたという。北房では、その道を臍帯道（ほそんじみち）と呼んでいる。

事例5 「臍帯寺道」

それ（臍帯寺道）はねえ、そこからずつとそこを、もう歩いてはと

ても行けやしません、向こうの山を越して行く何（道）があるんです。もういわゆる有漢（うかん）、有漢町へねえ、もうずつと通うのに、山越し。今は通れんと思えますよ。私らは、山へ草あ刈りに、尾根伝いにねえ行つてから、向こうへ越して下りたらもう、有漢町。あの山の、境界の向こうがねえ、有漢になる。こっちは中津井ですけど。あの四ツ畝（よつうね）ゆづ山があるんですけど、あの四つこつ畝になったなあ。昔お城があった。（臍帯寺は）四ツ畝のすぐ奥へあったのが、後に、出てきて。まあそのすぐ近くへ部落がありますけどな。¹⁴⁾

北房町上水田小殿で採集した 事例5 は、北房町の小殿周辺から有漢町の四ツ畝に向かう山道（臍帯寺道）がかつてあったという語りである。なお、この道に関して、『北房町史 民俗編』「臍帯寺道（ほそんじみち）」の項には、「小殿の奥の池のところから、曾根伝いに登つて、高妻山の南側へ出て、たらの木から登った、前述の道に合する道がある。この道も利用する人が多かった。」と記されている（この臍帯寺道の途中に近年まで大きな古い「たらの木」があったため、「たらの木道」とも呼ばれていたそうである）。小殿周辺から旧臍帯寺へ向かう臍帯寺道は、現在は通る人もいないが、かつては多くの人が利用した道であったという。小殿の地から旧臍帯寺へ玄寶の母が参詣したという伝説は、かつてのこの地域の生活圏・信仰圏の範囲の中で生まれた、生活実態に即した伝説であったことがわかり、興味深い。

細尾寺が臍帯寺に改められたことに関して、『有漢町史 地区誌編』は、「伝承によると奈良時代の昔、玄寶僧都の誕生の時この寺に籠つて靈験があったので安産にちなんでこの寺名に変わったといわれていたが、現在残っている延宝元年（一六七三）の棟札によると細尾寺となっており、享保十二年（一七二七）の棟札には臍帯寺となっており、そのころに変えられたもののようで、享保のころの名僧有雅上人が安産観音

の御利益をたたえて寺名を、読みをそのままに、文字だけを変えたといわれている^⑧と記している。この解説文は、享保の頃に臈帯寺と変わったとみられることから、奈良時代に玄寶の母が臈帯を納めたことにより寺名が変えられたという伝承に疑問を呈している。しかし、別の面からいえば、享保の頃に玄寶の臈帯奉納伝説が広がり、その結果寺名表記が臈帯寺と変えられた可能性も考えてみる必要があるように思われる。享保十二年と享保十三年の棟札に「広大山臈帯寺宥雅」とあることから、享保の頃に寺名表記を「臈帯寺」と改めた人物とみられている宥雅は、元文三年（一七三八）に入寂し、その墓塔には「当山中興開基」と記されているそうである^⑨。このことから、衰えた寺勢を回復させるために、宥雅が享保の頃に玄寶の臈帯奉納伝説を積極的に取り入れて寺名表記を改め、その結果、寺勢が回復して「当山中興開基」とたたえられた可能性も考えておく必要がある。つまり、享保十二年（一七二七）の棟札に「臈帯寺」という表記がみられることから逆に、玄寶の臈帯奉納伝説が生じた時期は、少なくとも享保の頃までさかのぼることができる、とも考えることができるわけである。

郡神社と玄寶

玄寶が生まれたという伝説が残っている岡山県上房郡北房町上水田小殿には、郡神社（こおりじんじや）という神社がある。郡神社は、この地で亡くなったとされる吉備稚武彦命を祭神とする旧郷社で、近世阿賀郡の一宮とされた古社である。神社の西南にある前方後円墳は吉備稚武彦命の古墳であるという。上水田小殿の「高僧屋敷」のすぐ前にある古社であるためか、玄寶との関わりを伝える伝説が伝承されている。

事例6 「郡神社と玄寶の下馬とがめ」

郡神社はねえ、この、玄寶さんがなんか、馬に乗ってねえ、そこを、郡神社の前を通ったら、なんか馬があばれてから、

「こりゃあ偉い、神さんを祭ったんじやなあ、いうてからいわれたとかいう、そのまあ、言い伝えなんですけど。そういうことでまあ、この郡神社はまだ古いですしねえ。ここはもう、今あれ書いてあるように奈良時代のなんですからなあ。そういうことで、まあ、ここを歩き来されるのに、玄寶さんがそういうなことを、言われたいうてから。

あばれて、へでもう、ここはもう降りて、まあいわゆる、高貴な人を祭った、お宮じゃからいうんで、されたとかいうのは聞いたるんですけどなあ。玄寶さんが言われたいうて。

郡神社は古いです。これはもう、四道（しどう）將軍時代ですから吉備津彦命のねえ、弟がこつち来てこのへんからまあその、山陰の方を治めて、へで最終的にここで亡くなったんですと、あの吉備稚武彦命^⑩。

この「郡神社と玄寶の下馬とがめ」は、玄寶が馬に乗って郡神社の前を通ったところ、馬があばれたので「こりゃあ偉い神さんを祭ったんじやなあ」と言って下馬したという話である。この話は郡神社の前を乗馬で過ぎると落馬するという「下馬とがめ」の伝説として知られており、『上房郡誌』にも「玄寶僧都嘗て騎馬にて廟前を過ぎんとし馬前まず、異み里人に正せしに古来有位有官の人廟前を過ぎ欠礼せば忽ち神罰ありと聞き馬を下りて罪を謝したり、乃ち僧都其の靈験に感じ贈位を請ひ現今の地に社殿を造り奉遷し正一位郡大明神と称す」と記されている。『上房郡誌』の記述によれば、玄寶は郡神社の靈験に感じて正一位の贈位を請い、今の地に社殿を造ったということであるが、郡神社に残されている文書等によれば、「享保四年から同二十年に至る間に」従一位から正一位に昇位したらしいということである^⑪。

上水田小殿に関して、『岡山県の地名』には「上水田小殿に英賀郡衙跡と推定されている遺跡があり、近くに郡神社も存在し、英賀郡の政治的中心としての位置を占めたと考えられる。また白鳳期に建立され吉備寺式瓦をもつ英賀廃寺も上水田にあり、備中南部の勢力と密接な関係にあったことを示している」と記されている。地名「高僧屋敷」や郡神社のある上水田小殿は、かつては英賀郡の政治的中心としての位置を占め、近くには白鳳期に建立され吉備寺式瓦をもつ英賀廃寺があったというこの記述から、この地ならば玄寶生誕地伝説が生じてもおかしくないことがわかり、非常に興味深いものがある。

結語

以上で、これまで存在が知られていなかった備中国の玄寶生誕地伝説についての筆者なりの論述を終えることとする。岡山県上房郡北房町上水田小殿周辺および上房郡有漢町上有漢周辺における玄寶の伝説としては、「玄寶生誕地高僧屋敷と臍帯寺」、「高僧屋敷と行者様」、「玄寶の母と臍帯寺」、「郡神社と玄寶の下馬とがめ」などがある。また、玄寶の母が玄寶の臍帯を納めたという広大山臍帯寺には「広大山縁起」がある。この「広大山縁起」は、江戸時代末期から明治時代初期頃の土地の伝承を参考として、臍帯寺三十三世大本英学氏が、臍帯寺で三十三年に一回行われてきた観音堂御開扉の明治二十八年（一八九五）の法要の際に作成したものと推定される。新しいものではあるが、現在ではすでに聞くことができなくなっている玄寶に関する伝説や臍帯寺にまつわる伝説が記されており、伝説研究のうえでは有益である。

「広大山縁起」によれば、備中国で出生した玄寶は、母の胎内で十二カ月たっても生まれなかつたため母が細尾寺で祈ると、夢で靈童が安産

を告げ、十三カ月で生まれた。後、母子共に参籠して仏恩を謝して臍帯を納め、臍帯奉納の因縁から細尾寺を臍帯寺と改めた。長じて名僧となつた玄寶は、やがて阿賀郡湯川に庵居し、湯川寺と近いので折々この山寺に登ってきたという。

臍帯寺には行基開基伝承がある。行基が本尊の聖観音菩薩等三像を彫つたという仏像造立伝説や、行基が梅の木の散杖で巖穴を加持すると泉がわいたという「杖つき井戸」の伝説、地にさしたその散杖が根付いて老木となつていったという「杖梅」の伝説などが伝承されている。現在の臍帯寺の本堂奥の崖下にある關伽水をくむ泉は、行基井戸と呼ばれている。

玄寶は南都「法相宗」興福寺の高僧であつた。玄寶が活躍した平安時代初期は天台宗や真言宗はまだ草創期で、南都六宗（三論・法相・華嚴・律・成実・俱舍）が日本仏教の主流の時代であつた。岡山県には、「法相宗」の行基ゆかりの寺が四十一ヶ寺ある。この数は、中国地方の他県と比較して極端に多い（鳥取県八、島根県九、広島県九、山口県十）。行基が近畿地方を出ることなく生涯を終えたことは近年の研究により明らかにされているが、行基伝承を持つ寺は全国で千四百ヶ寺にのぼる。各地方ごとに、行基伝承が生じた原因は異なるとみられるが、筆者は岡山県に行基伝承を持つ寺が非常に多い原因の一つとして、平安時代初期に「法相宗」の玄寶が来訪した事実が深く関与していると推定している。本稿で検討した臍帯寺の行基開基伝承も、玄寶と備中国との関係の深さが何らかの影響を与えて成立したとみてよいように思われる。また、玄寶生誕地とされ、「高僧屋敷」という地名が残っている北房町上水田小殿は、かつては英賀郡の政治的中心としての位置を占め、近くには白鳳期に建立され吉備寺式瓦をもつ英賀廃寺があつたといい、この地ならば玄寶生誕地伝説が生じてもおかしくないことがわかる。史料が少ないため玄寶

の生誕地を特定することは困難であるが、玄寶と備中国との関係の深さを考えると、備中国に玄寶生誕地伝説が生じた必然性はそれなりにあることがわかり、非常に興味深い。

本稿では、備中国における玄寶生誕地伝説について研究し考察を加えた。本稿で検討できなかった他地域の玄寶伝説の解明に関しては、今後の課題としたい。

注

〔本稿における諸資料よりの引用文中、旧漢字・異体字は原則として通行の字体に改めた。〕

- ① 西村稔氏「玄寶僧都観の変遷」、『園田学園女子大学論文集 第9号』一九七四・12、原田行造氏「玄寶説話に託した編者の意図」(同氏)『中世説話文学の研究 上』桜楓社・一九八一、所収)、渡辺貞磨氏「玄寶説話考」、『大谷学報』一九八六・2)、広田哲通氏「隠者の原型 玄寶像の形成」(同氏)『中世仏教説話の研究』勉誠社・一九八七、所収)、ほか。
- ② 例えば、興福寺本『僧綱補任』弘仁五年の項に、大僧都の玄寶が「遁去住」備中国湯川山寺」(『大日本仏教全書』)とあり、『類聚国史』第百八十五・仏道部十二・高僧の弘仁七年八月二十日の項に、「玄寶法師住備中国哲多郡」(『新訂増補国史大系』)とある。
- ③ 拙稿「備中国湯川寺における玄寶伝説」(『新見女子短期大学紀要 第17巻』一九九六・12)、「岡山県における玄寶僧都伝説の研究」(『文化、芸術、教育活動に関する研究論叢 第16集』両備櫻園記念財団、二〇〇三・8)、「備中国における玄寶終焉地伝説」(『論究日本文学 第79号』二〇〇三・12)、「湯川寺縁起と玄寶僧都伝説」(『唱導文学研究 第四集』三弥井書店・二〇〇四刊行予定)、参照。
- ④ 『大日本仏教全書』第一二三冊、七八頁。東京大学史料編纂所蔵『僧綱補任』(原蔵興福寺、影写明治四十四、架3016/号2)の該当部分には、「六月十七日入滅」(傍点筆者)とある。

- ⑤ 『大日本仏教全書』第一〇一冊、一〇八頁。
- ⑥ 『大日本仏教全書』第一〇三冊、六三八―六三九頁。
- ⑦ 奥田楽淡『備中略史』(『新編吉備叢書』(一)『歴史図書社』一九七六、所収)、一一七頁。
- ⑧ 注⑦の『新編吉備叢書』(一)の「備中略史解題」、一一九頁。
- ⑨ 話者は岡山県上房郡北房町上水田小殿の武村博さん(T11・11・11)。平成十四年(二〇〇二)七月二十四日・原田調査、採集稿。
- ⑩ 話者は岡山県上房郡北房町上水田小殿の武村敏子さん(T9・3・31)。平成十四年(二〇〇二)七月二十四日・原田調査、採集稿。
- ⑪ 『有漢町史 地区誌編』(有漢町・一九九七)の「資料」(二)広大山縁起書写(片山家文書)の項、四二―四三頁。
- ⑫ 話者は岡山県上房郡有漢町上有漢長代の大本一学さん(S25・10・12)。平成十四年(二〇〇二)七月二十四日・原田調査、採集稿。
- ⑬ 話者は注⑫の大本一学さん。平成十四年(二〇〇二)七月二十四日・原田調査、採集稿。
- ⑭ 話者は注⑨の武村博さん。平成十四年(二〇〇二)七月二十四日・原田調査、採集稿。
- ⑮ 『北房町史 民俗編』(北房町・一九八三)、一五一頁。
- ⑯ 注⑪の『有漢町史 地区誌編』、四〇一頁。
- ⑰ 大本琢寿氏『臍帯寺と其文化財』(臍帯寺・一九六二)、二頁。
- ⑱ 話者は注⑨の武村博さん。平成十四年(二〇〇二)七月二十四日・原田調査、採集稿。
- ⑲ 『上房郡誌』(名著出版・一九七二)私立上房郡教育会・一九一三の複製)の「郡神社」の項、一一〇八頁。
- ⑳ 『郡神社社記』(郡神社保存顕彰委員会・一九五四)、五五頁。
- ㉑ 『岡山県の地名』(平凡社・一九八八)の「水田郷」の項、六七八頁。
- ㉒ 井上薫氏編『行基事典』(国書刊行会・一九九七)所収「行基伝承寺院分布地図」の岡山県の項、五二二頁。筆者原田の調査では、岡山県の行基伝承寺院の数は「行基事典」の調査より多いが、ここでは同一基準による中国地方五県の行基伝承寺院数として、「行基事典」に従った。
- ㉓ 注⑫の『行基事典』所収「行基伝承寺院分布地図」、五二二―五二三

頁。

② 国書刊行会編集部編『行基事典 特別付録 行基ゆかりの寺院』（国書刊行会・一九九七）七頁。

〔付記〕

岡山県北房町・有漢町での調査では、臈帯寺の大本一学御住職、小殿の武村博さん、有漢の蛭田禎男さんに大変お世話になった。記して感謝申し上げます。

（新見公立短期大学助教授）